

地域合同労組運動の形成を

中 河 友 (北西地域労研)

われわれは、もしこの暗い時代を雄々しく切り抜きたいと思ふならば、ソフォクレスのアイアスのように、あだなる望みでいい気になつてはいられない。

シモーヌ・ヴェーユ

一、はじめに

今日も、またどこかの工場が閉鎖されたことだろう。

臨時・パート労働者が大量にまず首を切られ、昨年までは、なりふりかまわず系列下をうながされてきた無数の下請工場が切りすてられ、数千単位の工場が閉鎖され、千人・二千人単位の一時帰休(レイオフ)と数百人単位の首切りが続出し、工場に残つた労働者に対しても、より一層の労働密度の強化の中で労働災害職業病による人間破壊が今まで以上におそいかかるにちがいない。

今日、完全失業者は百万人を突破し、一時帰休対象者は、三月十日の段階でのべ五三五万人に達している。さらに山谷・釜ヶ崎・横浜寿町等の寄せ場労働者約三百万人は、昨年来、職のないまま放置され無数の生命が奪われつつづけている。

ほう大な「社内留保」というかくし金をふところにおさめてのたえまない不況宣伝の中で、「身分保障か賃上げか」をせまる資本の前に、企業内組合はあげて「生活防衛から企業防衛」へとつづばしる。

高度成長の中で、一定の幻想とある種のあきらめをもって黙々と自己の全人格を企業社会に従属させてきた人々は、今、沈黙を続けることによつて際限ない生活破壊に身をまかすのか、さもなくば自らの手でその破壊を阻止するののかという、のつびきならぬ選択をせまられつつある。

繊維、電機、金属をはじめ全産業にわたつて、不況を口実とした一時帰休、賃金カット、首切り、工場閉鎖、労働密度の強化といった大合理化の嵐が吹き荒れている中で、ほとんどの労働組合が、この大合理化差別分断攻撃になんら闘いといえる闘いを組みえていない。それらは、資本の攻撃から労働者を守るどころか、大合理化に積極的な協力さえしている。しかも特徴的にいえることは、組合幹部の問題性だけでなく、いわゆる下部組合員の姿勢でもある。自らの生活よりも企業防衛にほんそうするこれらの姿は、企業意識に粹どられ、職場内部と系列下企業の労働者への差

別分断を許してきた、企業における位階制に基盤をもつほとんどの企業内労働組合にとって当然の帰結といえるかもしれない。

とどまる事を知らぬ人間破壊・生活破壊の進行の前に、既成の労働運動と諸政党はなすすべを知らぬかのごとく後退を続け、自ら体制の補完としての位置へ走り続けている。昨年よりひきついだ七五「国民春闘」は、その一つの主要な柱「全国一律最低賃金制」の獲得を、スト処分保留を浮きあがらせることによつて、ストライキを放棄し、自ら彼岸のかなたへとおしやつてしまった。資本が、自らの延命を計るためにいくばくかのアメをばらまくとしても、それが自らの死活の基盤を掘りくずしかねないもので会議のテーブルで、しかも、本気でストライキという武器を振り上げるつもりのない労働者に対してさし出すというのだろうか。

「全国一律最賃制」——それは、最賃の額と闘い方闘いの過程によつて、資本に重大な打撃を与える。七三年賃金構造基本調査（十人以上の企業）によると、賃金分布の中心数は八三・五〇円だが、女子労働者の九五％がそれ以下に分布し、男子労働者は約三分の一の三八％だが年令別には十歳台で九八％、二十歳台で七五％、五十歳台で三六％、六十歳台で七七％が中位以下となっている。これらの数字は、圧倒的な女子と、男子若年層及び高年令層が平均賃金以下の低賃金の状態に在ることをはっきりと示している。さらに、この中位数以下の層は五四・〇〇円をヤマとしてこれを中心に分布しているが、全労働者の二五％が五四・〇〇円以下にあり、とくに女子労働者の六六％、九九十人の規模の企業の労働者の三六％がここに属している。そしてさらに、賃金実態ということではこの層の下に、基本調査で含まれていない

十人以下の零細企業やパート・季節工などの低賃金労働者が広汎に配置される。

このように、男女間、「身障者」およびつくり出された階層による賃金差別と低賃金による使い棄てによつて利潤をふやし、かつそれを利用して労働者間の分断と企業への忠誠心を育ててきた日本の企業にとつて、一定水準の最賃制の強制は、その支配の足もとをくずされることを意味する。しかも、すべての労働者が、一律最賃の意味と根底に流れる思想を資本との闘いの中で獲得する時、労働者間の差別と企業社会への分断従属を容認してきた日本の労働者運動は大きく転換するに違いない。その闘いの展開は必然的に、本工主義・企業内主義との訣別をもたらさざるをえないし、又、それとの訣別なしに発展しえないからである。したがつて企業内労働組の寄せ集まりでしかない総評をはじめとする既成の労組が、「全国一律最賃制」の闘いを真に実力によつて闘いえないのは、これもまた当然の帰結といえる。

そして、不況宣伝の中で昨年並かそれ以上の大幅賃上げを要求しながらも大合理化に全く抗しえないことによつて「ハリコの虎」同然の「国民春闘」は、政府・日経連の賃上げ抑制の壁を突破しえないでいる。職場の中の身分・賃金・男女差別を許容し、合理化を認めた上での本工至上主義の賃金闘争であつた『春闘』——それは、とりもなおさず総評を中心とした既成労働運動のもろさが、資本の本格的な攻勢の前にあつて露呈したといえる。

二、なにをなすべきか

では、現状のなかで、われわれは何をなすべきだろうか。すく

なくとも、なにができるか。

「新左派」労働者は、六十年代の帝国主義的な労働体系、及び秩序の再編強化と、それを補完する既成労働運動との格闘のなかから新たな労働者運動の萌芽をつくり出してきた。

しかしそれは、国内支配の強権的再編統合・差別分断支配の一層の強化、悪性インフレ・大合理化の進行、産業構造の転換と海外侵略の強化、労働運動の総体的体制内化と真に対決し、これを打ち破るほどの力をもった明確な潮流とは、なりえていない。労働者が、自らの足元を見直し、問いたださざるをえない現状の中で、既成政党と労働運動は、虚構の「民主的政権」をめざし議会主義への回路へ労働者の闘いと組織を流し込み、戦闘性と自主自律性を解体することを通して、一層、労働者の解放を困難なものとしている。

われわれは、現状を打破しようとするとともに、現状を打破していく闘いの中に「未決」を準備しうるような労働者組織と運動を形成しなければならぬ。七五春闘は、既成戦線の矛盾と弱さを完膚なきまでさらけだすとともに、われわれを含む「新左派」労働者運動にとって重大な試練をかすだろう。

われわれは、社会と職場における一切の差別も、一人の首切りも許さず、職場秩序の管理強化と労働密度の強化と工場閉鎖に対し、職場を基本とする闘いを通して労働者の力の自覚と資本に対する対抗的（二重）権力の形成をめざす。そして、幾つかの闘いの中ですでに端的にあらわれているが、対抗的権力の形成の中で自治管理を準備せねばならない。それは、おのが「労働」の意味を問い、資本主義社会における「労働」をめぐっての「権力不

在性」を克服していく闘いでもある。

しかし、この闘いは、系列下された資本と真に対決し、現在の分断を自らたちきり階級的な団結を形成していくこと抜きに実現しない。それは、企業を越え地域を軸として形成される労働者組織にこそ、にないうる闘いである。そして、現代の資本と労働の構造のなかで、その様な労働者組織が不在であるとすれば、早急に全力をあげてつくりだすことこそ、自主的・自立的な解放をめざす労働者の仕事であろう。

三、地域合労働運動の基本的視点

そのような闘いをにないうる労働者組織として、地域合同労組を提起してきた。（本誌三、四号）その基本的な視点をもう一度整理してみよう。

それは、(1)個人加盟制と、(2)地域別組織を組織原則とする。

(1) 職業、企業規模、失業の有無、及び既成労組に加入しているか未組織にかかわらず個人の自主的参加を原則とし、「すべての労働者の連帯を可能とすることが組織形態の基本であるという認識に立ち、その実現として、合同労組は個人加盟の原則に立つのである。

(2) 地域的に組織する積極的意味は、「地域の社会、労働と生活の場に固執することによって労働者の全的復権を意図することにある」、運動の中央集権化を排除する有効な手段でもある。

この二つの組織原則を持つ新しい合同労組は現実の社会的情勢の中で何を基盤とし、誰をその運動の主体とするのだろうか。

△その社会的基盤▽ 日本の労働組合（既存の）は、大半が、

企業内労働組合として組織されている。そして、現代の資本と労働の構造的関係（これについては後記）に規定されるとともに、その持つて生まれた組織の性格によつて企業Ⅱ資本と一体化し、自らの手でその枠組みを打ち破ることができない。

「そこから次の問題が提出される。一つは、日本の経済構造に特徴的である膨大な中小企業労働者を未組織の状態に放置せざるを得ないこと。第二点は、その縮図ともいえる同一企業内に働く臨時労働者の存在であり、この点においても現在の労働組合はこの差別雇用策に抵抗し得ない。何故なら、既成労働組合は差別雇用制度に即した本工組合であるからである。」

ここで指摘されている問題とともに現代の日本においては、資本の独占集中化と、それによる系列化が一層進行している。中小企業における労働運動は、下請の問題といつても過言であるまい。下請労働者の闘いは、当の下請資本との関係とともに親資本との闘いを抜きに解決を計れぬ構造にある。この問題にも企業内労働たる既存労働は有効に対応しえない。

それと、後にもう一度ふれたいと思うが、かつての「上層」労働者、すなわちⅡ重構造Ⅲにおける上部に位置する労働者の一定の流動化を問題にしなければならぬ。労働組合が労務管理機構と化していくことへの労働者の素朴な疑問と、大企業における企業内労働組合が、下部労働者の利害を真に代表しえない現実を見る必要がある。

Ⅳその主体Ⅴしたがって新しい地域合労働の担い手は、大企業の内部における下層の労働者をも含む中小企業労働者、臨時工（社外工、季節工、日雇い、パート）及び地域の消費生活を支

える店員等一切の現代的意味における下部・下層労働者である。

この点が、「中小企業労働者の横断組織」と規定され、産業別整理への過渡的なものとして位置付けられている既成の合同労組との違いであり、それは、現実の具体的な運動の中で決定的な違いとなる。

四、その課題Ⅱ戦略的な環

三、で簡単にその基本的な視点をあげた訳だが、そこでは、たぶん組織論的な問題提起であつた。そして、われわれのみならず、既成の企業内労働に新しい合同労組形成を提起・対置する時ほとんどそれは、組織論的な問題提起に終始している。旧来の図式的なⅡ重構造Ⅲの把握の上にたつて「下層労働者」の不遇を訴え、そこに合同労組を組織しようと提起するのみでは、現代の労働者革命の問題を構造的に把握しえないのみならず、実際の労働の組織化と闘いも前進しえないだろう。われわれは、現代日本の資本と労働の構造的形態——新しい現実を具体的につかみ、そこからみちびきだされる闘いの課題、目標、質等、すなわち戦略的な環をすえねばならないのではないか。その戦略的な環を欠落させた組織論的提起も運動形成も、なんら具体的現実の中で有効に対応しえないだろう。

戦略的な環、すなわち目標をみちびきだす為に、今一度、現代日本の資本と労働の関係をとらえ直す必要があるのではないか。

それは、一般にいわれる「上層」Ⅱ「基幹産業の労働者」「下層」Ⅱ「中小零細の労働者」という分け方（「下層」に社外、臨時パート労働者等を含む）は、現代日本の新しい現実を正しくとらえ

ていない。それは、六〇年代の高度成長の中でうみ出された基幹産業における本工労働者の流動化（戦闘化ではないが）現象と資本による労働者支配の変遷という現実をみていない。

現代の日本資本主義は、「基幹」産業の内部にぼろ大な数の社外工を配置しているし、社内本工（みょうな言葉だが）内部においても断えざる技術革新、システム化の中で少数の本工男子のエリート社員（それは、技術者、企業内において昇進可能な事務職管理職及び、それらの候補生である。）と、その補完労働・単純労働を担う下部本工労働者との階層分化が存在する。それは「労働」をめぐる主従の関係だけではなく、女性労働者への差別、賃金差別等資本による意図的な差別政策によって拍車がかけられている。加えて、年功序列賃金体系と本工―臨時工制度の新たな再編により下部本工労働者の流動化が始まっているのである。

そしてそれは第一に「大企業本工全体が、終身雇傭制の中で企業に長くどまりえない状況をつくりだしたことを意味し」「下層労働者」層に、単純労働と低賃金と専制秩序に反抗を起させる基盤をつくったことである。」

第二に、「大企業本工」が、かつて、年功序列賃金と終身雇傭制のなかで一定自足的賃金を得ていたのが崩れ、これらの本工も多就業世帯を形成しなくては生活できない事態となっている。既婚の婦人労働者の職場進出は多分にその結果である。

第三に、少数男子本工（上層労働者）を存在基盤とする企業内労組が、単純労働者（下部本工をも含む）に対する企業の専制的支配の重要な道具となっている。

第四に、下層労働者の企業への忠誠心は、崩れつつあるが、「労働」

の構造にも規定されて、企業意識として残存している。

以上の様な簡単だが、現状認識をふまえるとき、企業内組合解体的問題意識と新しい合労運動の戦略的な環が設定される。それは、本工―臨時工制度の解体と、年功賃金秩序打破、そして全国一律最低賃金制の実現として集約できる。

五、むすびにかえて

われわれは、本誌の幾号かにわたって幾度となく「企業内組合」の批判を通して、「社会変革の担い手として、その一つの社会的基盤であり、組織であり、運動体であるところのものとして」新たな地域合同労組運動の可能性の検討と、その形成を提起してきた。

不十分ながら検討の中で明らかにしてきたように、それは、既成労働運動に対して、われわれの理念を具体的に実現していく組織論として対置しうるとともに、現代日本の資本と労働の構造にもっともみあった運動だからである。

その運動は、日本の労働運動総体の中にあつては今だに極少派ながら、東京と関西を中心に飛躍への胎動を開始している。そして、二十余年の闘いの歴史を有する富士地区の運動も、今、過去の闘いの教訓を学び整理・点検することを通して新たな飛躍をめざしている。

くりかえし述べてきたように、地域合労運動は、突然天空からふってきたものではない。それは、企業ごとの分断に加え、様々な位階・階層による差別分断支配と、労働における「無権力性」――全人格の資本及びシステムへの一層の従属化への反乱が、末

端職場における資本の専制的支配と、その支配から本来労働者を守るべき存在の△労働組合▽によって圧殺されつづけるという歴史の中から生み出されてきたものである。

しかし、自由共産主義的労働者の大半は、いまだこの運動に合流しえていないか、残念なことに無関心である。自由共産主義的労働者運動すなわち△労働者の解放は労働者自身の手で▽というスローガンに固執し、△自由▽と△社会主義▽を一体不可分のものとして追求した労働者運動が戦前に壊滅して以来、われわれは、運動の歴史から断絶して出発する以外になかったのである。そして今、われわれは、六十年代後半からの労働者の新しい闘いの胎動の中から生み出された地域合労働運動の只中にいる。だが、現在、全国に点在する自由共産主義的労働者の大半は、既成の戦線（労働組）の中で公然とした反対派たることができず、かといって独自の戦線もつくりえず、いわば△工場の外▽から労働組合運動一般を批判するか、工場から△天空▽に昇って“アナキズム運動”をいかにつくるのか、アナキストの運動をどう展開するかという議論にそのエネルギーの大半をついやしている。工場職場を基礎とした△労働者▽の運動（それはもちろん資本によって設定された企業の枠を越え地域を視座とする）を語らぬ不毛さを断ち切るところからわれわれは出発した。擬制の政治と前衛主義者を拒否し、自身の生活の拠点を真に△生活の拠点▽たらしめる闘いから出発した。

とはいえ、われわれは俗にいう△労働組合主義者▽ではないし、△労働組合▽を魔法の杖とも思っていない。歴史のある時、ある場所では解放への武器であったものが、別の空間の中では解放

への道をそらす道具に変わりうるからである。そして、労働者はその変質に対し、その時代の資本と労働の構造と関係に最も適切に対応し自からを解放へと導びきうる組織形態と運動を模索しつつ生み出してきた。その一つとして、工場評議会・労働者評議会運動が存在してきた。

われわれは、新しい地域合同労働運動を形成・推進しながらも工場・労働者評議会の思想に十分注意をはらう必要がある。それは、強固な資本の労働者管理機構と化した大企業内労働組が一夜のうちに崩壊しえないとすれば、日本の労働者運動の展望の中に新しい地域合労働運動と固く結合した新たな労働者組織が必要とされるだろうからである。

一般的議論としての「組合はだめ」ならば労働者評議会を、というのではなく、前記の観点から労働者評議会運動に注意を払わねばならないだろう。それも、思想の「輸入」としてではなく。そして枚数もつきてきたので今後の課題としてもう一点簡単にあげると、スペインCNTとフランス・アメリカを始めとする革命的サンディカリズム——フランスCGT、アメリカIWWの運動を、現代日本における労働者運動をいかに展開するのかわという視点のもとに与えかねず必要性があるのではないか。これらの運動は、地方連合と全国的な職業別ないし産業別組合の功妙な結合で成り立っていた。産業の労働者管理をめざす時、地域労働組の全国連合というだけでは不十分であるかもしれない。

×

×

×

編集後記

▽一連のスケジュール闘争的な「運動」の日程が消化されて行く中で、統一地方選にも春闘にも、現在の私達の運動は何ほどの対応もなしえていないのではないかと、という疑念が拭えてはいないが、それでは私達の運動とは何なのか？ 本号の組織論と自治管理についての特集がそれにいくらかでも解明の手がかりを与えてくれるはずである。本誌のタイトル『アナキズム』にとら

われることなく、私達にとって運動とは何なのか、どのように闘うのかを、読者諸氏とともに解明してみたい。本誌の記事に対する様々な意見を編集部まで送ってもらいたい。論争もまた、それが単なるレッテルはりやあげ足とりでないかぎり、私達に何かをもたらすものだろうから。(けい)
▽連載の「金宗鎮伝」と「世界語・エスベラント」は、執筆者の都合で本号は休載となりました。いずれも次号をもって完結となりますが、それに伴ない『アナキズム』誌も新企画をもって、さらに充実した誌面をお送りできるより頑張りたい。(M)

▽一冊の『アナキズム』誌を刊行するのに要する時間は莫大なものだ。一回の会合に三時間、それを十回くりかえすとして三十三時間、その場に平均四人参集するから延百二十時間の労働。もちろん原稿整理、校正などの持ち帰りの仕事があるからたいへんな仕事である。

こういう仕事が報われるのは、とにかくより多くの人に読まれて、反応が具体的にあらわれることをおいてない。こちらとしては、より焦点をしぼった内容の濃い企画を現実化していくための努力を惜しまないといえるだけである。

今号は、わたしは予行演習的に編集に参加しただけだったが、次号からは腰をいれてやっていくつもりだ。(G)

▽七号の編集は、従来の編集トリオに二、三名の協力スタッフの参加があり、幾分肩の荷をおろすことが出来た。次号からは、新しい編集スタッフのもとに発行されることになるだろう。

それと同時に、内容面での討議が内部でなされるようになった。次号の企画と並行して、編集方針を検討していくことが決まった。これまでの家内工業的な編集体勢が

これを契機に対外的にもその基本姿勢を明示し、自らを検証する場を設定することになる。(オク)

定期購読のお願い

本誌の長期的かつ安定した発行体制のために、本誌の定期購読を訴えます。

購読料 年間(四号分・送料含) 一五〇〇円

振替 東京二一四一六一一

アナキズム編集委員会

アナキズム 七号

発行日

一九七五年五月二五日

発行所

日本アナキズム研究センター

静岡県富士宮市杉田二五一

編集部

東京都千代田区神田神保町二の三二

大同会館内 現代思想社気付

アナキズム編集委員会

Anarkismo

JAPANA CENTRO POR ESPLORO DE ANARKISMO

ĉe RYU-Buiĉirô
Sugita 251, FUZINOMIYA,
Shizuoka, Japanio.

n-ro 7

Majo 1975

...ENHAVO...

Mejlŝtono por reakiri la «aŭtonomion»

—Pripenso pri ĝenerala elektado de lokaj deputitoj k
<lokaj aŭtonomioj>— ...MINAMIJIMA-Jirô 2.

—Pri reformigoj de teorioj pri organizado—

Revolucieco en organizo ...IŜIKAŬA-Genzô 8.

Disfalo k reviviĝo —Malsanoj de la movadoj de nuntempaj
maldekstruloj ...NIŜIDA-Hirokazu 16.

Pensoj pri B.B. k organizo ...RENDAIĜI-Ŝin 25.

«La Tajdo» 29.

...Notoj de la movado..Organoj..Gazetartikoloj..Libroj..

«Opinioj» 31.

Pri la gazeto "Interrogation" ...EGUĈI-Kan

Notoj pri edukado (IV) ...KITAGAŬA-Kitarô

Recenzo: "La anarkistoj" de J.Joll ...MIJASAKA-Êiĉi

Signifo de la kontraŭnuklea ŝipo FRI ...TOKOMA-Cunejo

«Anarkisto k Memadministrado» —El la franca gazeto
"Auto-gestion" Trad. k red. de FUJUKAŬA 40.

I. Kondiĉoj por la revolucio de memadministrado

II. Koncepto de anarkosindikalistoj pri memadministrado

III. Scienca koncepto pri liberecana komunismo

"Cronstadt Izvestias"(3) N-roj 6-7..trad.JOŜIHARA-Bunmê 60.

Starigu la movadon de lokaj komunaj sindikatoj/
...NAKAGAŬA-Jû 75.

Postskribo ...Red. 81.

♦ Kovrilo-Desegno=IŜIKAŬA-Genzô/Foto=

黒の手帖 NO.18

目次

労働と機械	大沢正道	1
「大杉栄の旅」小感(3)	秋山清	18
書評 硬骨のヒューマニズム	清水清	27
民族と土地(2)	G・ランダウアー	30
船の思想(3)	松尾和彦訳	36
ナショナリズムと文化(1)	R・ロッカー	43
	大沢正道訳	

定価 300円 (送料55円)

黒の手帖社

東京都新宿区北山伏町33 大沢方
振替・東京102465
2号分前納 600円
4号分前納 1200円
(いずれも送料含)

黒の手帖 第17号目次 1974年6月

ランダウアー・生涯と思想(下)	長谷川進
民族と土地——	G・ランダウアー
社会主義ターゼ30(1)	松尾和彦訳
「大杉栄の旅」小感(2)	秋山清
書評 10年後の甦りに	大沢正道
船の思想(2)	菅田正昭
朔風(きたかぜ)	宋世何
スペイン革命に おけるCNT(16)	ホセ・ペイラツ 今村五月訳
	定価 250円

黒の手帖 第16号目次 1973年11月

人間における遊戯と労働 (5)	大沢正道
「大杉栄の旅」小感 (1)	秋山清
船の思想 (1)	菅田正昭
ランダウアー・生涯と活動(上)	長谷川進
スペイン革命に おけるCNT (15)	ホセ・ペイラツ 今村五月訳
	定価 250円

アナキズムとエスペラント

向井孝著

山鹿泰治 人とその生涯

六〇〇円

草創期のエスペラント運動、そして大杉栄との出会いを通じて日本のアナキズム運動にユニークな足跡を残した山鹿泰治の初の評伝。大杉を助けて・中国のアナキズム運動・日本アナキスト連盟と共に他。

東京都板橋区赤塚2-35-9 白樺ハウス10号

青蛾房

(取扱い書)

高群逸枝 評論シリーズ

女性史研究会編集・発行

婦人戦線に立つ	I (品切れ)	二五〇円
婦人戦線に立つ	II	三〇〇円
婦人運動の実践題目		三二〇円
婦人運動の単一体系		三二〇円

大正末から昭和初期にかけて、アナ・ボル論争の渦中で執筆された「アナキズム」「女」「恋愛」そして婦人運動論など、高群逸枝に欠くことのできない初期評論集の集大成。

小川正夫評論集

性とアナキズム

六〇〇円

同書刊行会編集・発行

大杉栄書簡集

飛鳥井雅道解説

ナイーヴな感性と果敢な行動を合わせ持ち、それゆえ権力の魔手に斃れねばならなかった革命家。大杉栄の生の軌跡と豊かな可能性をいきいきと伝える書簡集

1500円

アナキスト詩集

秋山清編 萩原恭次郎・岡本潤・小野十三郎・植村諦・伊藤和・猪狩満直・秋山清・押切順三・高島洋・向井孝の一〇詩人によるアナキスト詩の初のアソロジー

1800円

日本無政府共産党

相沢尚夫他著

権力を廃絶し、真の共産主義を建設するカギは何か——ファシズムに抗し、旧来のレーニン主義とアナキズムを共に超克しようとした幻の〈党〉の理論と実践！

1500円

自由聯合・自由連合新聞(復刻版)

『自由聯合・自由連合新聞』復刻版刊行会刊
小松隆二解説 大正末期から昭和10年に至る激動の時代に発行された日本アナキズム運動史解明に不可欠な資料の完全復刻 B4判486頁上製クロス装函入

12000円

アナキズム 第七号 一九七五年五月二五日発行(年四回季刊)

●アナキズム叢書

バクーニン I

国家と無政府 神と国家 他

1500円

バクーニン II

連合主義・社会主義および反神学主義他

830円

クロポトキン I

叛逆者のことば 相互扶助論

1800円

クロポトキン II

パンの略取 田園・工場・仕事場

1500円

ブルードン I

一九世紀における革命の一般理念

1300円

ブルードン II

労働者階級の政治的能力について

1500円

ブルードン III

連合主義の原理 所有とは何か

1500円

ネットラウ

アナキズム小史

1200円

H・M・ピルモヴァ 佐野努訳

バクーニン伝 上下

各980円

石川三四郎

虚無の霊光

980円

三一書房

東京都千代田区神田駿河台2-9